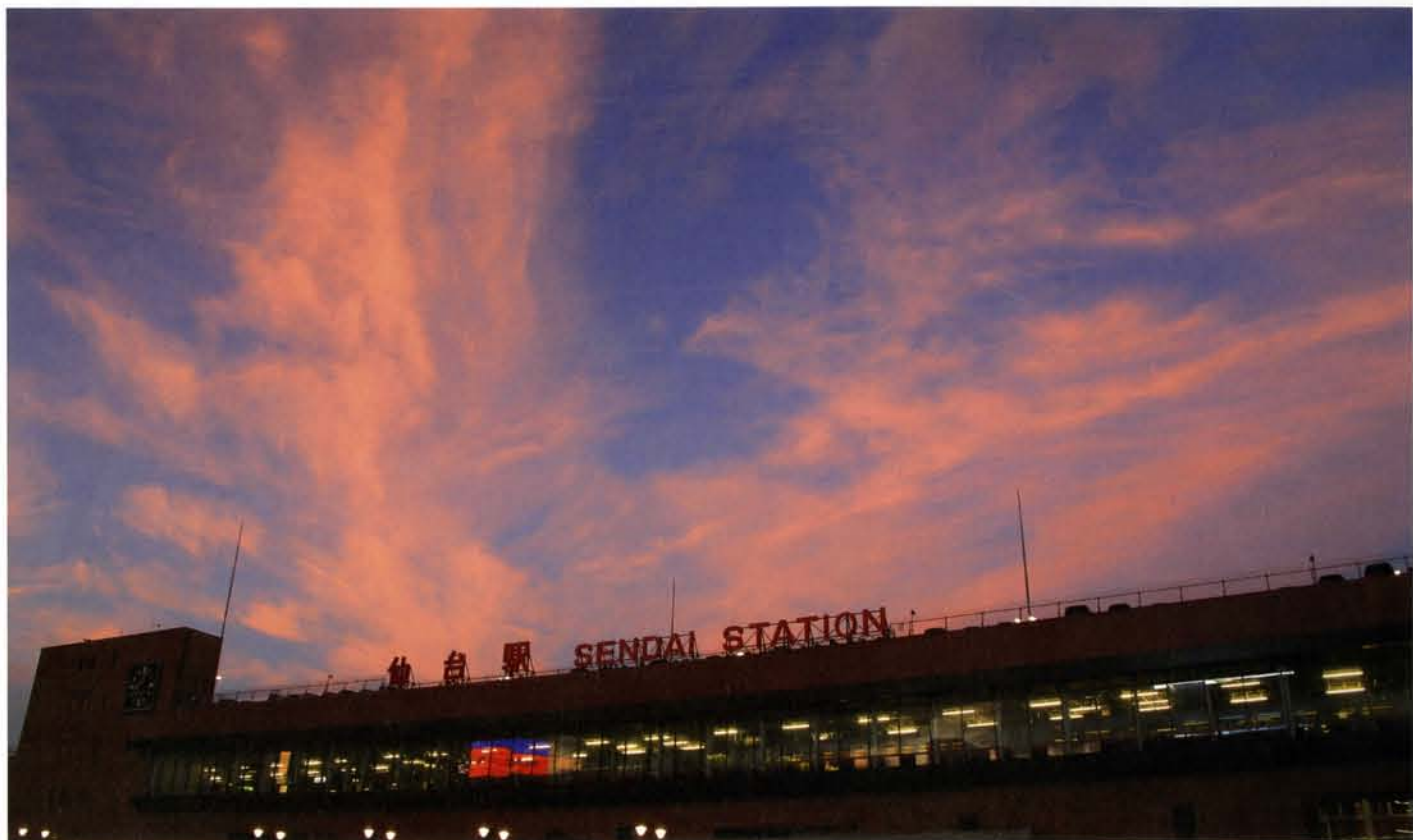


# 仙台文学館ニュース

Sendai Literature Museum News

第二十九号



夕暮れの仙台駅

「蒸しパン」  
 仙台が焼けてさえないなかつたら、仙台には二、三の知人もいるし、途中下車して、何とか頼んで見る事も出来るでしょうが、ご存じの如く、仙台市は既に大半焼けてしまっているように感じたから、それもかなわず、ええ、もう、この下の子は、餓死にきまった。自分も三十七まで生きて来たばかりに、いろいろの苦勞をなめるわい、思えば、つまらねえ三十七年間であった、などとそれこそ思いが愚かしく千々に乱れ、上の女の子に桃の皮をむいてやったりしているうちに、そろそろ下の男の子が眼をさまし、むずかり出しました。  
 「何も、もう無いんだらう。」  
 「ええ。」  
 「蒸しパンでもあるといいんだがなあ。」  
 その私の絶望の声に、あ、わたくし、……  
 「蒸しパンなら、あ、わたくし、……」  
 という不思議な囁きが天から聞えました。  
 (中略)  
 「あ、お昼につくったのですから、大丈夫だと思えますけど。それから、……これは、お赤飯です。それから、……これは、卵です。」  
 つぎつぎと、ハトロン紙の包が私の膝の上に積み重ねられました。私は何も言えず、ただぼんやり、窓の外を眺めていました。夕焼けに映えて森が真赤に燃えていました。汽車がとまって、そこは仙台駅でした。  
 「失礼します。お嬢ちゃん、さようなら。」  
 女のひとは、そう言っただけで私のところの窓からさっさと降りてゆきました。  
 私も妻も、一言も何もお礼を言うひまが、なかったのです。そのひとに、その女のひとに、私は逢いたいです。としの頃は、はたち前後。その時の服装は、白い半袖のシャツに、久留米紺のモンペをつけていました。一種のにくしみを含めて言いたいのです。  
 「お嬢さん。あの時は、たすかりました。あの時の乞食は、私です。」と。  
 (太宰治「たすねびと」)



『太宰治全集』8所収 (2004年 筑摩文庫)

## 蒸しパン

文学のある風景

## 小池 光の 気になる日本語

18

### 新幹線の愛称

金沢まで新幹線が走ることになり、八月に金沢まで行く予定があるので、乗るのが楽しみである。もっとも長野から先はトンネルに次ぐトンネルと聞いたので、高速地下鉄に乗っているようなあんばいだらう。

この北陸新幹線の愛称が「かがやき」ということである。なんと「かがやき」なのか考えてみたがよくわからない。加賀の国の加賀を「かがやき」の「かが」にひっかけているのかとも思ったが、そんな複雑なことをJRがするとは思えず、だいいちそれは「やき」とは何だ、ということになる。

いま全国を網羅する新幹線の愛称は、すべてひらがなで、ひらがな三文字か四文字、ときに二文字で命名されている。

東北新幹線は「はやぶさ」「はやて」「やまびこ」「なすの」。秋田新幹線は「こまち」。山形新幹線が「つばさ」。上越新幹線は「とき」「たにがわ」。

北陸新幹線は「かがやき」「はくたか」、長野までなら現行の

「あさま」。東海道・山陽新幹線は「のぞみ」と「こだま」「ひかり」。九州新幹線はたしか「さくら」そのほかだった筈。

こう書き並べてみると、統一が全然取れていないように感ずる。一方に「はやぶさ(隼)」「とき(朱鷺)」「はくたか(白鷹)」という鳥名があるかと思えば、一方に一般名詞の「つばさ」がある。山の名前の「あさま(浅間)」「たにがわ(谷川)」、地名の「なすの(那須野)」があるかと思えば、「はやて」「やまびこ」「かがやき」「のぞみ」「こだま」のようなまきりの一般名詞がある。なんかしっくりしない。

それに全部がひらがななので、はなはだ記憶しづらいのはわたしだけの(老化)現象なのであろうか。旧国鉄時代の特急には「白山」「雷鳥」など漢字で書くのがあって、なかなか味があつた。東北本線には「青葉」という急行も走っていた。

## 学芸室日記

○5月23日に開催中の特別展「どくとるマンボウの生涯-北杜夫の世界」の関連イベントとして、小池光ことばのセッション Vol.9「斎藤由香さんを迎えて」を開催しました。猛女とよばれた



祖母・輝子のエピソードや、父・北杜夫のそう病の時の苦勞ばなしを、映像を交えユーモアたっぷりにお話くださると、会場からはどっと笑いが起こっていました。北杜夫という作家には、シャープで感受性の強い繊細な面と、マンボウシリーズのユーモア性との両面があり、その幅の広さは父・茂吉に似ていると館長が指摘すると、由香さんは、亡くなってから

○7月17日から8月23日まで、「11びきのねこと馬場のぼるの世界展」を開催しました。馬場のぼるの代表作「11びきのねこ」シリーズをはじめとした絵本の原画やラフスケッチ、漫画家時代の作品の原稿や、2010年に発見された幼少期や青年期の貴重なノートやイラストをご紹介します。展示室には「11びきのねことぶた」に描かれる「ぶた

の家」も登場。家の中に入って記念撮影をするご家族が多く見られ、馬場のぼる作品の魅力を満喫していました。手作り工作が楽しめるコーナーでは、「11びきのねこ」のお面が大人気。お面をつけた子どもたちの姿で館内にほのぼのとした光景が広がりました。



## お知らせ

前号の仙台文学館ニュース「私の一冊」にご寄稿くださった、演劇評論家の扇田昭彦さんが、5月22日に逝去されました。扇田さんには、開館10周年記念特別展「井上ひさし展-吉里吉里国再発見」の図録「井上ひさしの世界」に原稿をお寄せいただいたのをはじめ、「仙台文学館ゼミナール2014 井上ひさし作品を読む」で講師をおつとめいただき、5回にわたって井上ひさしの戯曲の魅力をお話して

ただくなど、当館の事業に多大なお力添えを賜りました。心からお悔やみ申し上げますとともに、つつしんでご冥福をお祈り申し上げます。なお、9月から扇田さんを講師にお迎えして開催予定だった「仙台文学館ゼミナール2015 井上ひさし作品を読む」は、朝日新聞論説委員(文化担当)の山口宏子さんをお迎えして開催します。詳細はHPや市政だより等でお知らせいたします。

# 佐藤泰志『海炭市叙景』



『海炭市叙景』 佐藤泰志著 (小学館文庫)

小説を書いて暮らしているくらいだから、本そのものが大好きで、もの心ついて以来、平均以上に本を読んできたと思う。そんな愛すべき本たちではあるが、自分の人生に直接影響を与えた本があるかとなると、実は答えに窮する。本というものは

は、読書体験によって蓄積された総体として人格に影響を与えるものであるから、これだと挙げられる一冊は、なかなか存在し難くて当然とも言える。むしろ、この本によって私は救われました、だとか、この本によって人生観が変わりました、など

ということがあれば、それは本人の完全なる思い込みか、できれば奇跡的な出会いとするしかない。そんな思い込みに過ぎないのかもしれないが、私のなかでは奇跡的な本との出会いの体験を、二〇一一年の夏にした。東日本大震災があった年の夏である。

千年に一度のあの大津波で、私に馴染みのある街や風景がごとごとく破壊された。テレビで繰り返し流される津波の映像が、胸を抉った。手足を一本ずつ引き抜かれていくような痛みと喪失感に襲われた。

わなければならぬ。徹底的な破壊と混沌と、そして大量死を前にした時、言葉は無効だ。なす術もなく、言葉を失い、目の前の現実を見ているしかない。言葉には力がある——それは言葉の無力さを認めたくない者の虚しい悪あがきだ。言葉には力がある——そう言い切れるほど、私は傲慢になれない。

だと、これまた馴染みのショットバーに足を運んだ。先代のマスターが戦後間もなく始めた、地元では有名な老舗のバーだ。今は私と同年代の娘さんが切り盛りしており、地元民にとっても愛されている居心地のいいバーである。

千年に一度のあの大津波で、私に馴染みのある街や風景がごとごとく破壊された。テレビで繰り返し流される津波の映像が、胸を抉った。手足を一本ずつ引き抜かれていくような痛みと喪失感に襲われた。

かなり迷ったのだが、いつもの年のように、オートバイで北海道ツーリングに出かけることにした。震災の傷跡とは無縁の場所に、少しのあいだだけでも精神的な避難をしたかったのだと思う。

著者は函館出身の佐藤泰志。純文学の作家である。普段の私は、純文学系の小説を読むことはほとんどない。というより、震災後、あれだけ好きだった小説を読むことが出来なくなっていた。簡単に言えばつまらないのである。ほとんどの本は、最



言葉を扱うことを生業としてしているのが小説家である。その言葉が、あの大津波がもたらした破壊の前には無力だった。言葉そのものが意味を失った。言葉には力がある——震災後、よく耳にした物言いが、それに対して私は懐疑的だ。否定的でさえある。繰り返し言

いつものように函館に上陸して、馴染みの寿司屋で鰯を摘ん

だ。その本が『海炭市叙景』だった。

初の一ページで挫折した。書き手の自意識が文章の向こうに透けて見えて、全く物語の世界に入っていない。当時話題になっていたミステリーや、文章の巧さで定評のある作家の本も、かろうじて最後までページめくることはできたものの、読むことができなかったという満足感や充実感とは皆無で、期待を裏切られたような遺る瀬無さだけが残った。小説には、その小説世界のリアリティーが絶対的に必要なのだが、そのリアリティーが感じられないのだった。

に文字を追い始めた『海炭市叙景』だったのだが、本当に久しぶりに、この本を読んでよかった、という満足感を覚えた。小説の面白さと可能性をもう一度信じてみようという気になった。それほどまでに、人が生きていくこと(裏返せば死んでいくこと)への圧倒的なリアリティーが存在した。何がそれをもたらすのか、ここで詳しく説明することはほしなくていい。読んでみればわかるはずだから。

もちろん、純文学を云々などということではなく、今の私に可能な限り、リアリティーを追い求めた作品を書きたいと願った。そうして三年あまりをかけて少しずつ書き重ねてきた連作短篇の最終話を、つい先日書き

終えた。震災後五年目の来春、短篇集として刊行する予定だ。本のタイトルは、たぶん『仙河海叙景』になると思う。言うまでもなく、小説家としての私にとって命の恩人となった『海炭市叙景』へのオマージュである。



(撮影/小野みのる)

熊谷達也(くまがいたつや) 1958年、宮城県生まれ。東京電機大学工学部卒業。中学校教員、保険代理店業を経て、1997年『ウエンカムイの爪』で小説すばる新人賞を受賞しデビュー。2000年『漂泊の牙』で新田次郎文学賞を受賞、2004年『邂逅の森』で山本周五郎賞、直木賞をダブル受賞。自然と人間の共生を描いた作品のほか、『オヤジ・エイジロックンロール』『バイバイ・フォギーデー』など青春小説も手掛ける。宮城県気仙沼市をモデルとした『仙河海市』を舞台にした作品に、『微睡の海』『リアスの子』『ティーンズ・エッジ・ロックンロール』『潮の音、空の青、海の詩』がある。

## 熊谷達也さんと 仙台文学館

2003年11月29日 講演会「相剋の森—現代のマタギを追う—」

仙台文学館での初めての講演会。「相剋の森」は、「山は半分殺している」の意味を自分なりに理解したいと、実際に「マタギ」の方々に取材をして書き上げたノンフィクションの要素が強い作品だと紹介。様々なことを見聞き、物書きとして、物の見方が変わり、深まる体験ができてよかったと、100名を超えるお客様を前にお話をしました。



2004年9月26日 直木賞受賞記念対談

『邂逅の森』の第131回直木賞受賞を記念して、初代館長で直木賞選考委員だった井上ひさしとNHK仙台放送局で対談。「自然描写の折目正しさ」がこの作品の魅力と井上館長から絶賛された熊谷さんは、東北を「宝の山」と表現し「〈東北〉の僕の好きな世界を書いていきたい」と抱負を語っていました。



原稿「鈍行列車の女」 (『小説新潮』2005年3月号掲載)

普段の執筆はパソコンという熊谷さんの珍しい手書き原稿。この作品を執筆中、「氷結の森」の取材のためにシベリアに滞在。現地にはパソコンやメールはなく、編集者に原稿を送るために手書き原稿になったとのこと。半分に切れているのは、ファックス送信口の大きさに合せたため。現在、常設展示室でご紹介しています。



最新刊『潮の音、空の青、海の詩』 (2015年7月 NHK出版)

2013年5月から翌年4月まで『河北新報』に連載。震災後の仙河海市(気仙沼市がモデル)を舞台に、そこに生きる人びとの現在と未来を描く。人の営みと自然との関係に一石を投じた作品。





富弥の希望を反映させて描かれた夢二の屏風とともに

## 天江富弥と夢二の交流

天江富弥 (あまえ とみや)

(1899〈明治32〉年～1984〈昭和59〉年) 本名・富蔵。仙台生まれ、郷土研究家。

仙台の八幡町で代々続いた「天賞酒造」の三男として生まれる。雑誌『赤い鳥』に夢中になり、『おとぎの世界』に投稿する文学青年で、投稿欄で知り合った、後の童謡詩人・スズキヘキと一緒に、童謡雑誌『おてんとさん』を創刊。宮城の児童文化運動の立役者の一人。仙台市立商業学校在学中に、少年雑誌に掲載されていた夢二の絵に魅せられ、ファンレターを送ったのが機縁となり、夢二との交流が始まった。『おてんとさん』には、夢二も詩を寄せている。夢二没後は「夢二の会」の運営にも携わり、夢二作品のコレクターとしても知られた。



『おてんとさん』3号より  
(1921〈大正10〉年6月)



『夢二と共に』天江富弥著  
(1977〈昭和52〉年1月)

らんきょうばんしゅう  
「嵐峡晩秋」  
(大正中期／絹本彩色)  
日光竹久夢二美術館蔵



「稚き日の記憶」  
(大正中期／絹本彩色)  
日光竹久夢二美術館蔵



「宵待(待宵)草」  
(1918〈大正7〉年／石版画)  
『セノオ楽譜』掲載

特別展

# 竹久夢二・詩と絵の世界

——愛と、ロマンと、漂泊と——  
9月12日(土) ↓ 11月8日(日)



「大椿」千代紙  
(1914〈大正3〉年／木版画)

明治末期から大正、昭和にかけて、美人画や木版画、またグラフィックデザイナーとして活躍し、現在も熱烈なファンが多い竹久夢二の作品を幅広く紹介します。

竹久夢二(一八八四〔明治十七〕年～一九三四〔昭和九〕年)は、岡山県生まれ、専門的な美術教育を受けずに、「平民新聞」のコマ絵、女性雑誌「婦人グラフ」などのマスメディアや、印刷の絵はがき、詩画集などを通して広く人気を博した画家でした。自らも詩や短歌を創作し、抒情豊かなうたの世界を絵画に結晶させ、「夢二式美人」とよばれる、たおやかで愛いを秘めた黒い瞳の女性を描いて世を風靡しました。また、生活と結びついた美術を目指した夢二は、書籍の装幀などのグラフィックデザイン、広告ポスターなどの商業デザインも手がけ、大衆文化が発達した大正時代、これらの分野における先駆者でもありました。

本展では、漂泊の詩画人と称され、多彩な才能を発揮した夢二の生涯と作品世界を、女性や子どもを描いた肉筆画や版画をはじめ、装幀本、写真、新聞記事など様々な資料をご紹介します。

また、夢二は、熱心な夢二ファンであった仙台の郷土研究家・天江富弥と交友を育み、仙台の童謡専門雑誌『おてんとさん』にも作品を寄せていました。二人の交流と宮城・仙台と夢二の関わりについて、残された資料をもとに辿ります。



「ノンキナトウサン」  
(1925〈大正14〉年／石版画)  
『日本少年』掲載



「秋のしらべ」  
(1924〈大正13〉年／木版画)  
『婦人グラフ』掲載

### イベント

夢二の孫・竹久みなみさんの講演会や、夢二がデザインした風呂敷や包装紙を使用して和綴じノートやブックカバーを作るワークショップなどを予定しています。

詳細は仙台文学館にお問合せください。

### グッズ

夢二のデザインをモチーフにした、クリアファイルや一筆箋、風呂敷などのグッズを販売予定です。



**お知らせ**  
 仙台文学館の  
 ホームページ  
 リニューアル  
 ~公式 facebook、twitter  
 もはじめました

二〇一五(平成二十七年)四月、仙台文学館のホームページがリニューアルしました。展示やイベントなどの情報が見やすく整理されています。ページ左部には、仙台にゆかりのある作家のことがランダムで表示されます。石川啄木や尾形亀之助、井上ひさしなど、文学者たちのことをすこしでも身近に感じてもらいたいと思います。

仙台文学館の公式 facebook、twitter も始動しました。展示の様子やイベント情報、文学館で起こったちょっとした出来事を写真とともにお伝えしています。担当は日々ネタ探しに奮闘しています。



ホームページのトップページ



Facebookの記事



5月29日(金)、地元テレビ局の取材を逆取材!!



facebookQRコード



TwitterQRコード

**お知らせ**  
 こまつ座第111回公演・  
 仙台文学館企画事業  
 國語元年  
 2015年10月8日(木)  
 午後6時半開演  
 イズミティ21 大ホール



左南郷清之輔(八嶋智人) 右南郷光(朝海ひかる)

時は一八七四(明治七年)年、日本の話し言葉がまるでバラバラだった頃。文部省官吏・南郷清之輔の家には、全国各地から集まった人々(男・妻・女中・書生・車夫・居候……)が暮らしている。ある日、「全国統一話し言葉」の制定を命ぜられた清之輔は、その困難な任務に悪戦苦闘。様々な「お国ことば」が混在し、日本の言語状況の縮図ともいえる南郷家の日常のなかで、誰もが分る言葉を作り上げようとするが……。

**國語元年**  
 作:井上ひさし  
 演出:栗山民也  
 出演:八嶋智人 朝海ひかる  
 久保耐吉 那須佐代子  
 田根楽子 竹内都子  
 後藤浩明 佐藤 誓  
 土屋裕一 森川由樹  
 たかお鷹 山本龍二  
 日時:2015年10月8日(木)  
 午後6時半開演  
 会場:イズミティ21大ホール  
 入場料(全席指定・税込)  
 SS席6,500円(完売しました)  
 S席5,000円  
 A席4,000円  
 ユース(25歳以下)1,000円  
 ※未就学児童は入場できません。  
 プレイガイド  
 藤崎、仙台三越、チケットぴあ、ローチケ.com、仙台文学館、イズミティ21、日立システムズホール 仙台一階事務室、せんだい演劇工房10-BOX

**仙台文学館では、**  
**「國語元年」の創作資料を展示中!**  
 戯曲の原稿をはじめ、舞台となる南郷家の見取り図や、「全国統一話し言葉」発案から結末に至るまでのプロット、そして井上ひさしが執筆の際に作成した方言地図を紹介しています。



執筆に際して作成した方言地図

さようなら

「杜の小径」店長・三山タエ子さん

去る六月一日、仙台文学館内の喫茶「杜の小径」の店長・三山タエ子さんがお亡くなりになりました。三山さんは開館以来、十六年間「杜の小径」を切り

盛りしてきました。開館翌年二〇〇〇(平成十二年)の「石川啄木と寺山修司展」を皮切りに、向田邦子、藤沢周平、夏目漱石、松本清張などの展示にちな

んだ特別メニューをこれまでに五十点以上考え出し、文学館のもう一つの顔として、館を支えて下さいました。メニュー作りは、まずその作家を知ることからと言います。作家の生涯をひも解き、作品を読んだりしながら、ヒントを見つけていました。また時には作家の故郷を旅して、その土地ならではの食材を探し出し、旬の味を大切にしながら、他の人には真似のできない、三山さんならではのメニューを作り出してきました。時にはいいアイデアが見つからず、「どうしよう…困ったあ」と悩む姿もありました。しかし来館してくださった方を「おもてなししたい」との一念でスランプをのり越え、一緒になっ

て館を盛り上げてくれました。実際のところ、三山さんの特別メニューがお目当てのお客様も多かったのです。最後の「作品」になったのは、北杜夫展の「北さんあれこれ膳」。ご家族の方に教えていただいた北さんの好物を、アレンジしてバランスよくお膳にまとめたものでした。五月二十三日に店長として、北さんのご家族・斎藤喜美子さん、由香さん母娘をお迎えし、このお膳をお出ししたのが、最後のお勤めになりました。文字通り、力を振り絞り、最後まで全力で走り続けてくれた三山さん。ありがとうございました。



話し好きで人懐っこい性格だった三山さん。彼女とのお喋りを楽しみに来る方も多かったのです。



三山さん日く、最初に手がけた特別メニューの「はつと」。開館2年目の「ことばの地平—石川啄木と寺山修司」の二人展の際のもの。岩手出身の啄木にちなんだ郷土料理「ひつみつみ」で、その後定番メニューとなり、現在も「杜の小径」で提供しています。



初代館長井上ひさしの筆による色紙。三山さんの熱意を応援し、講座や講演会では、「杜の小径」の宣伝を忘れませんでした。



井上ひさしの文章講座で優秀な受講生に贈られた「杜の小径食事券」。



開館10周年を記念して、もう一度食べたいメニューの人気投票を行ったときの第1位となったメニュー「マドンナのランチ」。



三山さんは藤沢周平展の「海坂藩の食卓」が1位になると予想していましたが、こちらは第2位。



正月に提供していた「仙台雑煮」。焼きハゼにイクラ、かまぼこ、セリ、ズイキなどが入り、お出汁は三山家に伝えられた味で、ハゼの他に昆布や鰹節も合せたもの。この味を求めて、新年開館の初日には長蛇の列ができました。



「北さんあれこれ膳」。ご家族の方から「このミネストローネ、家の味とそっくり」、「野菜の切り方も同じ」と驚かれ、どれもおいしいお味と褒められました。